

学部・研究科名 地域環境科学研究科
 学部長・研究科委員長名 竹内 康
 学科名・専攻名 林学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 講じている <input type="checkbox"/> 一部講じている <input type="checkbox"/> 講じていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施。専攻会議他を活用した検討に加え、各分野・研究室間における意見交換等も実施し、体系的な編成を構築するように全教員が取り組んでいる。	研究テーマ、進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を継続的に実施している。 大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において手厚く行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。さらに分野を超えた専門的知識を有する外部有識者との連携も図られつつある。	学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 専攻内の所信発表会、中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差異が生じないように専攻内で議論している。また、研究室内での発表によるプレゼンテーション能力の向上を図っている。	シラバスの内容の定期的な点検、授業計画・内容の検討を通じた教育の改善・向上を実施している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に取り組んでいる。	【長所】 各学生の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献できている。	【長所】 各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上を実現している。	【長所】 各学生に対する個別対応による学習成果の把握・評価の向上を実現している。	【長所】 定期的な点検による教育の内容・指導方法の改善・向上に寄与している。
	【特色】 ・授業の計画・内容の向上に繋がる。	【特色】 各学生の個別の状況に応じた修学の確保に繋がる。	【特色】 大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる。	【特色】 大学院生のテーマに合致した学習成果を適切に向上するプログラムを計画している。	【特色】 定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通じた教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきているため、各大学院生の研究によりそった授業の必要性が年々高まっている。	【問題点】 年々、大学運営に関する業務負担等も増加し、学内外での十分な調査研究困難な場合もある。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・さらに効果的な指導方法の確立が望まれる。	【課題】 ・複数の教員によるチームサポートの実現を構築するとともに、今般の状況に応じた教育体制の検討が急務。	【課題】 上記の取り組みの継続的な実施。	【課題】 新研究科移行に伴う、新たな授与方針の確認・確定作業。	【課題】 さらなる充実を期すための創意・工夫。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー	◆院生によるレポートおよびアンケート	◆学位論文審査に関する記録他	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻3ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	<p>入学者選抜制度や試験科目等の見直しおよび問題の難易度に関する検討を実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。</p> <p>I期入試においては、準備不足や曖昧な研究テーマな受験生がみられることもあるが、その後卒業時までの研究経験と期間で進学意欲が高まる学生も同様にみられるため、II期試験における受験希望者の扱いと入学希望者の拡大にも注力している。特に学外に本専攻の研究内容をPRし、学外からの受験生の確保にも努力を続けている。</p>	<p>入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。学部学生や博士前期課程の学生に対する進学受入れの意欲向上に向けた専攻内での相互点検も実施している。</p>
現状説明を 踏まえた 長所・特色	<p>【長所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公平・公正な選抜制度の運用に努力している。 <p>社会情勢、経済状況に対応しながら制度・体制を整備し、能動的に取り組んでいることは長所として捉えている。</p>	<p>【長所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる。
	<p>【特色】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会情勢、経済状況の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる。 	<p>【特色】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的な実施によるPDCAサイクルを通じた改善・向上が期待できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	<p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学生、院生の研究に対する意識や能動的な研究姿勢の啓蒙に努めている。 	<p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ毎年、心理的ストレスを有する大学院生がみられている。心理カウンセラーによる対応を必要とする院生の把握と適切な指導および支援方法の検討。
	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究科の改組に伴う学位名称の変更をはじめ、受験生には各分野の主たる領域、従たる領域を明確に理解してもらう広報戦略を課題として考えている。 	<p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要である。専攻内に教育点検の委員会を設置し、検討を継続する。
根拠資料名	<p>入試説明会の開催</p> <p>◆大学院入試募集要項、HP等、◆専攻3ポリシー</p>	◆入試選考委員会実施記録等

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> つなげている <input type="checkbox"/> 一部つなげている <input type="checkbox"/> つなげていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。 基本的に毎週実施している専攻会議において、随時実施している。	教員数が減少するなか、主幹となる科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど、適切な編成に努力している。 研究室単位でバランスの取れた教員の年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻教授会を中心に検討し、指導教授により構成される委員会にて適切に決定している。	研究室単位で発表会を行うなど、若手教員のFD向上がみられる。 専攻独自にFD研修会などは開催していないが、積極的に学内のFD講習会に参加し、参加の推進もおこなっている。 授業評価アンケート実施とその結果を適正に認識して学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について専攻内で共有し、点検・評価することを毎年奨励している。 若手教員指導体制が確立するよう意識した活動を計画している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・教員組織の編成方針作成による編制を明確化している。	【長所】 ・専修分野に対応した教員組織の明確化に繋げている。	【長所】 ・会議を通じた情報の共有・議論の展開に寄与している。	【長所】 ・会議を通じた議論・検討の機会を確保できている。	【長所】 ・定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与している。
	【特色】 ・フィールド調査および屋内実験等での研究指導を実施するなど、学生の学習と研究への貢献を実現している。	【特色】 ・学生の研究に繋がる指導が可能な教員配置を意識している。	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・教員数の定数が、現在の学生対応として、教育の量的・質的な低下をもたらしつつある。	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・各雑務の増大が、研究、教育時間の減少のみならず、教員間のコミュニケーション時間の低下もまねく傾向がある。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・上記の取り組みの継続的な実施。	【課題】 ・研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 ・雑務の増大により論文の執筆活動が停滞している教員も散見されるため、論文執筆を促すための具体的な工夫が必要。	【課題】 ・効率的な事務作業等を検討し、十分なコミュニケーションを図る。	【課題】 ・若手教員の研究力向上のための検討を継続する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP等	専攻教員配置表、学生便覧、HP等	専攻会議資料	専攻会議資料

学部・研究科名 地域環境科学研究科
 学部長・研究科委員長名 竹内 康
 学科名・専攻名 農業工学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 講じている <input type="checkbox"/> 一部講じている <input type="checkbox"/> 講じていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input type="checkbox"/> 行っている <input checked="" type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を修得するための科目を体系的に配当している。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、問題抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とした教育を実施している。	専攻全体で行う行事では、学生、教員間の研究交流を重視し、円滑な情報交換により学習効果を高め、活性化する活動に重点を置いている。前期には博士前期課程・後期課程合同で研究発表会を実施している。 大学全体で実施している大学院生研究発表会への参加を学生・教員の双方に促し、研究の相互理解を深めるよう取り組んでいる。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもとで開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院担当教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与の可否を決定している。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録においては、主査が作成した後、全ての大学院担当教員が確認し、提出している。	学位授与方針の元、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に学位を授与している。	大学院生による授業評価をセメスターごとに実施しており、その結果を受けて優先的に対応すべき課題の抽出と分析を行い、改善計画を提出している。併せて、作成した改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次回の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続している。 今年度も農業工学専攻会議を毎週開催し、学生教育・指導に対して迅速な対応を取り改善・向上を図った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力の確立を目指している点。	【長所】 ・他専攻・他専修の学生との交流が活発になり、研究生活での学生の孤立が避けられる。	【長所】 ・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定している。	【長所】 ・技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指している。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できている
	【特色】 ・地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の4つの専修で構成し、専修ごとに高度な専門教育を行っている。	【特色】 ・多くの専攻の学生が一堂に会することから、大学全体での一体感が育まれる。	【特色】 ・専攻内にある4専修合同での学位審査を行っていることから、幅広い見地で評価が行われている。	【特色】 ・主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価している。	【特色】 ・1専修あたりでの学生数が少ないことから、専修全体でのイベントにおいて学生、教員間での交流を密にすることを心掛けている
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答内容の信憑性が低くなっている可能性が懸念される。
	【課題】 ・新カリに伴う学科改組を踏まえ、新カリ世代の大学院入学（2028年度）に合わせた専修の改組実施が必要	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・回答率を上昇させる必要がある。
根拠資料名	・開設科目（A1-①-1） ・カリキュラムツリー（A1-①-2） ・シラバス(例)（A1-①-3）	・大学院生研究発表会（A1-②-1） ・中間発表会（A1-②-2） ・修士論文発表会（A1-②-3）	・修士論文発表会採点平均点（A1-③-1） ・学位論文審査報告会実施記録(例)（A1-③-2）	・中間発表会（A1-②-2） ・修士論文発表会（A1-②-3） ・修士論文発表会採点平均点（A1-③-1） ・修了判定根拠資料（A1-④-1）	・授業評価アンケート結果（A1-⑤-1） ・授業改善計画書（A1-⑤-2） ・専攻会議議事録（A1-⑤-3）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻では、以下の学生受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施している。また、入学者選抜試験においては、受験者に対してアドミッション・ポリシーの認知状況についての回答を求めており、その内容を入試判定における評価点の一部として活用している。	学生受け入れ時の事前相談や説明会内容の適切性について評価を行っている。さらにその結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・いくつかの入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指している。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・留学生を多数受け入れる他、海外においても活躍できる人材の育成にも努めている。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・工学分野においては求人が多く、就職率が高いため、日本人学生の進学率が低い傾向がある。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・農業工学専攻の魅力をアピールするとともに、優秀な日本人学生の進学率を向上させる。	【課題】 ・優秀な日本人学生の確保につながる受入れ方法を確立する。
根拠資料名	・募集要項（A2-①-1） ・大学院入試説明会（A2-①-2）	特になし

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> している <input checked="" type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input type="checkbox"/> つなげている <input checked="" type="checkbox"/> 一部つなげている <input type="checkbox"/> つなげていない	<input type="checkbox"/> 行っている <input checked="" type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する現状説明	教員組織の編制に関する方針を明示している。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制している。	資格審査基準等に則り、教員の募集、採用、昇任等を適切に実施している。人事は学部で行っており、2025年度新規採用者について公募を実施し准教授1名を採用した。なお、2026年度新規採用に向けても現在公募を行っている。また、昇格については、専攻内教授会において研究業績を踏まえて審議を行い、2026年度は教授への昇格者2名を決定している。	修士論文・博士論文中間発表会や年度末の修士論文発表会、博士論文専攻内発表会や公開発表会など、専攻全教員の参加のもと実施することで、研究視野の拡充に努めている。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に教員個人の点検・評価には取り組んでいる。教員組織の適切性については、教育システム評価委員会により点検・評価の機会がある。改善・向上に向けた取り組みは専攻委員会において検討することになっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・多様な研究に触れる機会が増加する。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・英語も活用するなどして留学生の満足度を高めるのと同時に、日本人学生の国際意識の高揚に努めている。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・研究交流が活発化し、研究者としての資質が向上する。	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	・教員組織編成の方針 (A3-①-1)	・指導教授一覧 (A3-②-1) ・所属教員一覧 (A3-②-2)	・昇格に関する業績等調査依頼・回答書 (A3-③-1)	・中間発表会 (A1-②-2) ・修士論文発表会 (A1-②-3)	・自己教育評価依頼 (A3-⑤-1)

学部・研究科名 地域環境科学研究科
 学部長・研究科委員長名 竹内 康
 学科名・専攻名 造園学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 講じている <input type="checkbox"/> 一部講じている <input type="checkbox"/> 講じていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2021年度からの新体制(地域環境科学研究科造園学専攻)に基づき、新カリキュラムを施行している。専攻内における専門性を高めるとともに、造園学の幅の広さと社会的位置付け等体系的理解度の向上を継続的に実施している。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や課題や問題点の確認などを積極的に行う仕組みを構築している。また全学大学院研究発表会での発表を専攻所属大学院生全員に義務付けている。	専攻内の教員が評価基準に基づき成績評価を行なっている。また学位授与に際しては東京農業大学大学院規定の評価基準に基づき審査を行なった上で、専攻内会議での十分な議論に基づき最終評価を実施した。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組む仕組みを構築している。また、指導教員は各院生の学習状況を十分に把握し、研究成果を学会などで発表するよう積極的に指導を行なっている。	授業や論文指導などの改善について大学院生からの意見も含めて検討を行なっている。さらに実験・演習スペースの拡充を図るためにサイエンスポート内に設置した演習室 A～D の整備を継続的に実施している。少人数ゼミ開催のためのスペースの確保などをさらに検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・造園学の社会的役割を再認識し、専門性を深化してきた。	【長所】 院生における研究発表の意義の理解が進んだ。	【長所】 多面的かつ客観的な評価を実施している。	【長所】 学位授与方針に基づく学習成果の評価を適切に運用している。	【長所】 定期的かつ継続的な点検・評価の実施により、専攻全体における学習状況や研究実績の状況確認を可能にしている。
	【特色】 ・造園学の特色である広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴の明確化を行なっている。	【特色】 大学院生自身により専門領域の確認や妥当性の検証を行なった。	【特色】 多様な観点から厳正な評価を行なった。	【特色】 明瞭かつ公正な評価のあり方を常に確認した。	【特色】 大学院生からの意見なども反映させることで、適切性の担保に努めた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・博士前期課程の現行カリキュラムについて、専門性と総合性のバランスを図る検討の継続が必要である。	【問題点】 継続的な実施を可能とする体制作り及び予算措置が必要である。	【問題点】 教員の専門分野以外の研究に対して、評価内容の検証が必要である。	【問題点】 特になし	【問題点】 研究環境、特に実験・演習スペースが十分とはいえ、更なる場所や設備の確保の検討が必要である。
	【課題】 ・2021年度開始のカリキュラムについて、その学習効果の点検・改善検討を行う。	【課題】 教員及び大学院生内の更なる意識改革を進める。	【課題】 教員の専門分野以外の研究に対して、評価内容の検証が必要である。	【課題】 特になし	【課題】 サイエンスポートにおける実験・演習スペース充実のための継続的な検討に努める。11号館製図室の再整備を検討を進める。
根拠資料名	大学院カリキュラム	大学院研究発表会資料	大学院研究発表会資料	専攻3ポリシー	サイエンスポートの研究室配置

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	造園学専攻博士前期課程では、造園学に対する興味と意欲を有し、都市から自然地域における快適な環境をもたらすための知識と課題解決能力を持って研究を推進できる人材の育成を目指している。 大学院教育に興味を有する学部生に対して入試説明会や大学院論文発表会への参加を促している。事前入試説明会をⅠ期・Ⅱ期それぞれに実施し、かつ公正な入試の実施に努めた。	大学院Ⅰ期・Ⅱ期入試前だけでなく、大学院受験を希望する学生は卒業論文に関する相談を緻密に指導教員と実施するよう教育している。また専攻内教員間における日常的な議論を重視し、適切性の向上を図る取り組みを行なっている。学外からの志望者に対しては、研究生としての学習機会の確保を推奨している。 大学院Ⅰ期・Ⅱ期入試前に必ず大学院説明会を実施し、専攻の研究内容について十分理解が得られる工夫を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学部生に対して早い時期から大学院進学に関する情報を与えることにより、より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 ・教員による丁寧な大学院指導ができています。
	【特色】 ・大学院における専門教育への理解を早期から高めることで、研究意欲の高い人材の発掘につながる。	【特色】 ・学力のみならず、面談実施により志望者の研究に対する意欲をより適切に評価できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本学科内学部生の進学率をより高める必要がある。一方、学部生でも高い就職率であるがために大学院進学のリットが感じられないといった影響もある。	【問題点】 ・留学生や海外からの応募者において、研究能力が十分であるかなどの検証が困難なケースが見受けられた。
	【課題】 ・長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内等も積極的に行う必要がある。また学部生に対する大学院教育や研究の魅力発信を強化する必要がある。	【課題】 ・受験希望者(特に海外からの留学生志望者)に対しては、可能な限り早い時期から複数回、対面での相談などを実施し、研究能力や修学の意味確認をより密に実施することが重要である。
根拠資料名	2026年度大学院案内 大学院入試募集要項	指導教員の連絡先の開示（大学ホームページ）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> している <input checked="" type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input type="checkbox"/> している <input checked="" type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> つなげている <input type="checkbox"/> 一部つなげている <input type="checkbox"/> つなげていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する現状説明	専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように定期的な会議を開催し議論している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編制に基づき、専攻の教員組織の編制方針を作成し、本学の大学院案内やホームページ上で公開している。	国内および国外で、より高度な研究力を有する大学院指導教授有資格者の確保が必要である。	大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた長・中期ビジョンに基づき、採用を計画している。2026年度大学院指導教授の1名の採用を行った。	国際的視野も含め、本学造園学専攻の教育・研究方針のあり方について常に議論し、その方針に基づいた人員配置ができるよう努めた。	定期的に大学院指導教授会議を実施し、適切な教員配置について議論した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編成の充実化に影響する。	【長所】 ・教員採用、昇格に伴う教育研究活動の展開が可能となる。	【長所】 ・研究力・教育力の高い教員の採用を図るよう、今後の大学院教育のあり方について検討を重ねている。	【長所】 ・学科内指導教授及び大学院指導関係者間においても議論を行なっている。
	【特色】 ・専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制が構築可能である。	【特色】 ・新たな教員確保に伴う大学院教育の充実化を可能とする。	【特色】 ・教員の採用、昇格に伴う専攻内の教育研究活動の活性化が図られる。	【特色】 ・大学院教育のあり方について研究室及び分野、専攻内での検討を行い、検討内容の共有を図った。	【特色】 ・教員組織の適切性に関する議論を継続している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・今後、専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 ・今後、専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 ・造園学を修めた専門家の減少が喫緊の課題である。	【問題点】 ・日本国内の造園の特色を発信できる国際レベルの研究力をさらに充足する必要があるが生じている。	【問題点】 ・研究論文以外の学内活動やプロジェクト成果の評価判定が難しい。
	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた研究環境の拡充を図る必要がある。	【課題】 ・大学院指導教員の資格を有する教員確保に向け、長・中期ビジョンに基づく検討を継続的に実施する必要がある。	【課題】 ・高い研究力・教育力を有した大学院指導教員の育成および採用が必要である。	【課題】 ・高い研究力・教育力を有した大学院指導教員の育成および採用が必要である。	【課題】 ・研究テーマに応じた柔軟な指導体制など、新規性の高い教育方法を見出す必要がある。
根拠資料名	本学の大学院案内およびホームページ	本学の大学院案内およびホームページ	本学の大学院案内およびホームページ	本学の大学院案内およびホームページ	本学の大学院案内およびホームページ

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 講じている <input type="checkbox"/> 一部講じている <input type="checkbox"/> 講じていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」、「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって、教育課程を体系的に編成している。	講義科目と実験・演習科目との関連性を確認し、必要に応じて講義資料等の見直しを行っている。専攻会議を定期的に開催し、指導等教育全般について、教員間で情報を共有・確認している。	シラバスに成績評価基準を明記し、それに従った評価および単位認定を行っている。博士前期課程、後期課程ともに発表会ならびに最終選考会を実施し、研究の進捗状況の確認、学位授与の評価・審議を専攻全体で行っている。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。学位論文については、研究室に加え専攻として定期的に中間発表会を実施し、研究の進捗状況の確認を行っている。	専攻教員全員が参加する専攻会議において教務関連事項について審議し、適宜改善を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 「地域づくりを担うリーダーの育成」を意識した教育を実施している。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 指導教員ならびに研究室で研究の進捗を適宜把握するよう努めている。	【長所】 中間報告会および最終報告会は公開形式とし、研究分野を超えた質疑や批評の機会を設けている。
	【特色】 講義科目と実験・演習科目を学年ごとに適宜組合せ、実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施している。	【特色】 シラバスに沿って実施している。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し、地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 講義科目と実験・演習科目を適宜組合せ、実践的教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 授業評価アンケートの結果を教育指導の改善に活用する。
根拠資料名	シラバス、大学院学生便覧	シラバス 令和7年度 地域創成科学専攻 専攻会議議事録	シラバス、大学院学生便覧	シラバス、大学院学生便覧	大学院授業改善計画書 2026

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	理系、文系を問わず、「地域づくり」に積極的に取り組める学生を広く募集し、学力選抜試験を行っており、その結果を公表している。また、令和7年度より試験問題と解答例についても公表する取り組みを始めている。	入試選考会議は全教員が参加することとしており、学生の受け入れの適切性は担保されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学案内では、「地域づくり」をキーワードとした専攻紹介を行い、アドミッションポリシーを意識させている。	【長所】 理系、文系を問わず、幅広い人材を募集している。
	【特色】 特になし。	【特色】 「地域づくりの担い手となるリーダー」を目指す学生を募集している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	大学院案内	令和7年度 地域創成科学専攻 専攻会議議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> 一部している <input type="checkbox"/> していない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない	<input checked="" type="checkbox"/> つなげている <input type="checkbox"/> 一部つなげている <input type="checkbox"/> つなげていない	<input checked="" type="checkbox"/> 行っている <input type="checkbox"/> 一部行っている <input type="checkbox"/> 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学及び本研究科の教員組織の編制方針を踏まえ、本専攻の教育研究上の目的、教育目標及び3つの方針を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置している。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において、優れた教育・研究能力を備え、地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	退任教授と助教の教員に対して、毎年業績調査を行い、昇格について専攻教授会で審議している。	若手教員、特に任期制教員については、毎年面談を行い、教育実績、研究実績について、確認し、指導を行っている。	退職予定者の後任人事案件が生じた場合、後任補充にとどまらず、専攻の将来を見据えた教育研究分野の人材について審議し、枠取り申請ならびに教員公募の要件を設定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通りである。	【長所】 地域創成科学専攻の人材育成目標の達成と円滑な学科運営を重視している。	【長所】 十分な業績を有し、学科運営に積極的な若手教員を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり年齢の異なる 3 名の教員を配置し、若手教員の育成を図っている。	【長所】 専門分野の固定化に陥ることなく、時代の要請に応じた適材適所の人材を確保する。
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通りである。	【特色】 「地域づくり」という幅広い研究領域に対応している。	【特色】 特になし	【特色】 実習に全教員が参加することで、他教員の教育内容を聞き、互いの理解度を高めている。	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 大学院指導資格を有する教員の安定的な確保に向け、准教授、助教職の教員の研究時間を創出できるようサポートしつつ、業績や業務状況を把握する。	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	令和7年度 地域創成科学専攻 専攻教授会議事録	任期制教員指導記録。シラバス。	令和7年度 地域創成科学専攻 専攻教授会議事録。令和7年度地域創成科学科将来構想委員会議事録。

学部名・研究科名 地域環境科学研究科
 学部長名・研究科委員長名 竹内 康
 学科名・専攻名 林学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院の講義・実験実習における成績の評価に関する標準化	AP および DP に対応した大学院生の研究成果の構築とプレゼンテーションと論文発表力の向上	
実行サイクル	7 年サイクル (令和 5 年～令和 11 年)	7 年サイクル (令和 5 年～令和 11 年)	年サイクル (令和 年～ 年)
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策 (改善点) の検討 ③上記②の実実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会 (所信・中間・最終) の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、試験研究計画と実施・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	
目標達成を測定する指標	① <u>相対評価を実施する教員数 (比率)</u> ② <u>相対評価を実施する科目数 (比率)</u>	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価	
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・
	【課題】 ・さらなる評価の標準化を検討。	【課題】 ・学内外における研究発表の機会の確保と活発化を引き続き支援していく	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	森林科学、木質科学分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積(研究連携の推進)	
実行サイクル	___ 7 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	___ 7 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 11 年）	_____年サイクル（令和 年～ 年）
実施 スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への学生確保の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①競争的資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画・実施の策定 ②競争的資金等の獲得および日本学術振興会特別研究員採択に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化	
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①競争的資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数	
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし 【特色】 ・特になし	【長所】 ・特になし 【特色】 ・特になし	【長所】 ・ 【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし 【課題】 ・さらなる支援体制の充実に努める。	【問題点】 ・特になし 【課題】 ・コロナ禍で生まれたオンラインでのコミュニケーションを活用し、専攻外との共同研究を推進していく。	【問題点】 ・ 【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	林学専攻の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	7 年サイクル (令和 5 年～令和 11 年)	7 年サイクル (令和 5 年～令和 11 年)	7 年サイクル (令和 5 年～令和 11 年)
実施スケジュール	①現行研究科の検討と問題点の抽出 ②森林総合科学科の教育課程改革との関係性の検討 ③上記①と②を踏まえた専門分野の見直し (内容、名称、科目等) ④専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出	①大学院生の生活実態の把握 ②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集 ③大学院生への奨学金申請の促進	①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定および具体的計画を策定させる。 ②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。 ③適宜、指導教員による進路相談を実施する。
目標達成を測定する指標	① 令和 3 年 4 月にスタートした新研究科での研究推進	① 学外奨学金応募者数の増加 ② 奨学金応募者に占める奨学金受給者割合 ③ 外部の研究支援制度 (学振等) への応募支援をはかる	①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。	前回の 7 年サイクルの実行では、最終年度の令和 4 年度でも未実施の項目があったため、さらに同サイクルによる実行を目指していく。
現状説明を踏まえた長所・特色			
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 【課題】	【問題点】 【課題】	【問題点】 【課題】
根拠資料名			

学部・研究科名 地域環境科学研究科
 学部長・研究科委員長名 竹内 康
 学科名・専攻名 農業工学専攻

1. 教育に関する総合的事項

①	
目 標	シラバスに基づいた大学院授業の実施
実行サイクル	<u>1</u> 年サイクル（令和7年）
実施 スケジュール	前期 4月～7月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9月～1月 シラバスに沿った院授業の実施 12月～1月 令和7年度院授業シラバスの策定
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・アンケート結果（2025F）では、履修者の76%に「授業がシラバスに基づき行われた」と評価された。一方で14%は「どちらとも言えない」と回答した。“授業の到達目標を理解した”履修者が92%を占めた。“授業の難易度”については、「やや難しい」および「とても難しい」と回答した履修者が28%を占めたものの、“授業内容への興味”については、93%の履修者が「(強く)興味深いと思う」と評価された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし 【特色】 ・シラバスに則って授業を実施することで、学習・到達目標や授業科目相互の関係が明確になり学生の理解が促進される。教員は教育内容の評価・点検が容易になり授業の質の向上につながる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・回答者人数が「n=43」と記録されており、複数回答した大学院生が存在したと考えられる。授業ガイダンス時に授業の到達目標を明確に示す、履修者の理解度を確認しながら授業を進める、シラバスに変更があった場合は速やかに反映させることが対策として考えられる。 【課題】 ・システム上複数回答を回避する仕組みが必要である。 ・アンケートのみならず、講義中に履修者の理解度も確認しながらシラバスを見直す必要もある。
根拠資料名	授業評価アンケート結果（A1-⑤-1）

2. 研究に関する総合的事項

①	
目 標	大学院生に対する国内学会や国際会議などでの発表の推奨
実行サイクル	1 年サイクル（令和7年）
実施 スケジュール	4月から適時、農業工学分野における学会や国際会議などの情報を大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測 定する指標	大学院生1人あたりの国内学会や国際会議など発表回数
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input checked="" type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	<ul style="list-style-type: none"> ・学生による国際会議・国内学会での発表を奨励した。発表件数の網羅的な把握は行っていないものの、専攻内では12名が「大学院生海外研究発表支援プログラム」の採択者となり、うち11名が海外での国際学会等において研究発表を行った。 ・地域環境科学部（学部国際化推進委員会）主催の、国外研究者による特別講義や勉強会について、大学院生へ周知するとともに参加を奨励した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 <ul style="list-style-type: none"> ・多くの専門家と意見交換ができ、自身の研究の発展につながる。 【特色】 <ul style="list-style-type: none"> ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 <ul style="list-style-type: none"> ・国際学会の場合、渡航費が負担となる。 【課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラム以外の旅費の支援が課題である。
根拠資料名	2025年度大学院生海外研究発表支援プログラム採択結果及び業務コード（B2-①-1） 学部ミーティング資料「学部国際化推進委員会」（B2-①-2）

3. その他に関する総合的事項

①	
目 標	文化的背景を踏まえた専攻内での国際交流の活性化
実行サイクル	_ 1 _ 年サイクル（令和7年）
実施 スケジュール	年度内に専攻でイベントを開催する。
目標達成を測 定する指標	参加者を対象としたアンケート結果
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	<ul style="list-style-type: none"> ・メキシコ チャピング自治大学・学生の短期研修受入（9/3～12）を主導的に行った。 ・地域環境科学部（学部国際化推進委員会）主催の、国外研究者等による勉強会・ワークショップやトークショーについて、大学院生へ周知するとともに参加を奨励した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 <ul style="list-style-type: none"> ・世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材教育が期待できる。 【特色】 <ul style="list-style-type: none"> ・ない
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 <ul style="list-style-type: none"> ・研究分野が多岐にわたり、学会などの行事も授業期間外に実施されることが多い。そのため実施時期を選定することが難しい。 【課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・学会などのイベントもあり、日程調整に課題がある。
根拠資料名	受入報告書（B3-①-1） 学部ミーティング資料「学部国際化推進委員会」（B2-①-2）

学部・研究科名 地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名 竹内 康

学科名・専攻名 造園学専攻

1. 教育に関する総合的事項

①	
目 標	実学主義、実学教育をもとに、国際的視野により造園学の視点から「人間と自然との共存」を基本とした合理的かつ快適な土地空間を、科学的に創造あるいは保全し、体系化を図ることができる人材の育成を目標とする。
実行サイクル	2 年サイクル（令和6年～令和7年）
実施 スケジュール	専攻内研究発表会を定期的に行い、研究内容、発表内容の向上を図る。 国際感覚を養うため、造園調査法（演習）などのカリキュラムによる国内外の造園関連大学との交流を実施する。
目標達成を測 定する指標	定期的な大学院生の研究発表会における相互の意見交換、アドバイスに対する応答
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	東京農業大学大学院研究発表会に専攻内学生（博士前期課程）が全員参加した。また、東京農業大学論文発表会への参加を必修とし、専攻内学生全員が参加した。発表会における質疑応答時間を増加した。研究発表会要旨のフォーマットを改定し、研究内容をプレゼンテーションにおいてよりの確に伝える工夫を促した。今年度は国外造園関連大学との交流企画が充実し、さらに韓国造景家のドキュメンタリー映画のプレ上映会場で監督との交流を図るなど交流が広がった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・大学院発表会への参加を年間スケジュールに位置付けたことで、専攻内学生の全員の参加を可能とした。 【特色】 ・東京農業大学大学院研究発表会への参加はポスター発表の練習となり、かつ専攻外教員からの指導を仰ぐことができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・国際交流の日程告知が直前であったり、周知が不十分で都合が合わず、専攻内学生の参加にばらつきがあった。 【課題】 ・連携協定大学等との補助金申請により、継続性と助成金の確保を行うこと。交流の機会の告知を早め、より多くの学生の参加を促すように努めていく。
根拠資料名	造園学専攻中間発表会要旨集、造園学専攻最終発表会要旨集 東京農業大学大学院研究発表会発表資料 開催案内のフライヤー

2. 研究に関する総合的事項

①	
目 標	豊かな地域社会と社会資本の形成に貢献できる人材の養成を目的とし、大学院生の研究意欲の向上と修士論文・博士論文の質的向上を図る。
実行サイクル	__ 2 __ 年サイクル（令和6年～令和7年）
実施 スケジュール	東京農業大学大学院研究発表会への参加、国際学会誌への投稿、国際学会ワークショップへの出席・発表、造園学会全国大会への参加の他、関連学会への論文投稿数を増やす。
目標達成を測 定する指標	東京農業大学大学院研究発表会への参加・発表、国際学会誌への投稿数、国際学会ワークショップへの出席・発表数、造園学会全国大会への参加人数、関連学会への論文投稿数
自己評価 (☑を記入)	<input checked="" type="checkbox"/> 達成した <input type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	<p>全大学院生が東京農業大学大学院研究発表会においてポスター発表を行なった。</p> <p>日本造園学会全国大会、関東支部大会、その他学会における大学院生発表の増加を図った。</p>
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ 対外的な発表件数の増加を目標としている。
	【特色】 ・ 日本における造園学の特徴を研究や計画・設計コンペ作品によって発信している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ 専門学（造園）に関わる国際学会やワークショップが増加する中、その重要性や意義について十分に啓蒙しきれていない。
	【課題】 ・ 発表数は年々増加しているが、今後は研究内容の高度化を図る必要がある。
根拠資料名	・ 日本造園学会学会誌ランドスケープ研究 5 号論文集、オンライン論文集

3. その他に関する総合的事項

①	
目 標	国際的視野も含めた造園学の産・官・学の連携
実行サイクル	__ 2 __年サイクル（令和6年～令和7年）
実施 スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために、国内外のフィールドワークを通じて教育・研究の双方向の視点で連携を推進する。
目標達成を測 定する指標	海外協定校との交流数、産・官との共同プロジェクト数、連携による教育・研究成果の発信
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	産官学連携を目指した造園科学科100周年記念事業に基づく教育活動を実施した。 日本造園学会百周年記念イベント事業クロージングの開催を行った。 日本造園学会関東支部の開催を執り行い、同時に発表および交流の機会を創った。 国際横浜園芸博覧会における産・官・学連携に向けて準備を開始し、検討を進めた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・国際的視野を含めたフィールドワークのあり方や授業・研究のあり方を探求している。 【特色】 ・学部間協定校とのMOU締結後、教員の依命留学や学生の交換留学準備を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・国際的な造園学の産・官・学連携に関して、継続的な活動が必要である。 【課題】 ・社会状況を鑑みた産・官・学連携のあり方について戦略を立て、時代に即した啓蒙およびプログラム展開を実施する必要がある。
根拠資料名	・オープンカレッジ実施報告 ・造園科学科100周年記念事業の案内 ・日本造園学会ホームページ ・学科教員会資料

学部・研究科名 地域環境科学研究科

学部長・研究科委員長名 竹内 康

学科名・専攻名 地域創成科学専攻

1. 教育に関する総合的事項

①	
目 標	地域の自然と社会の再生に関する調査・評価手法などの高度な知識や、技術の修得と論理的・多面的な思考ができる創造的な研究能力の養成を通じて、地域づくりを担うリーダーシップを備えた人材を育成に向けてシラバスに基づいた院授業を着実に実施する。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和7年）
実施スケジュール	前期 4月～7月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9月～1月 シラバスに沿った院授業の実施 1月～3月 次年度授業シラバスの策定
目標達成を測定する指標	大学で実施する授業評価ならびに大学院生を対象としたアンケート集計結果
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	授業評価アンケートの解析の結果、学生は積極的に授業に取り組んでおり、出席状況も良好である。授業の内容や方法についても一定の評価を得ている。一方で授業の難易度や進行速度についての若干評価が低い結果であった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・教員の専門分野が多岐に及ぶこと、様々な地域との連携活動・実績があることから、本専攻科独自の教育が可能となっている。
	【特色】 ・現地調査に加えて、研究室での議論・取りまとめ・プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育を行っている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・授業の難易度と進行速度
	【課題】 ・学生の理解度を確認しながら授業を進めるよう対応する。また、教員に対して気軽に質問・回答できる機会と雰囲気を作る等の対応をとる。
根拠資料名	大学院生を対象とした授業評価アンケート集計結果

2. 研究に関する総合的事項

①	
目 標	大学院生に対して、学術活動・ワークショップ等への参加を促す。
実行サイクル	__1__年サイクル（令和7年）
実施 スケジュール	年間を通して、地域創成科学分野における各種学会・ワークショップ等の開催情報を提供・周知する。
目標達成を測 定する指標	令和7年度において、「参加数／在籍院生数=1」を目指す。
自己評価 (<input checked="" type="checkbox"/> を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	前期課程に在籍する2年生8名に対し、各種学会や研究会への入会を促した。また学会大会、ワークショップ等の開催情報を得るための指導、情報提供を行った。その結果、目標達成を測定する指標である、参加数／在籍院生数は、1.25となり目標を達成することができた。また関連する学会大会での研究報告（口頭発表、ポスター発表）数は10、論文投稿数1であった。後期課程に在籍する学生3名では、学会大会での研究報告が2、論文投稿数が1と、やや低調であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学会や研究会への参加は、学術分野を巡る状況の理解や資料作成やプレゼンテーション技術の習得、コミュニケーションのあり方など、研究者として多くのことを学ぶ機会になったものと考えている。
	【特色】 ・学会・研究会の紹介や情報を得るための手段の周知は入会の促進に、また関連学会の全国大会等の学術発表会のスケジュールの周知は参加や発表エントリーの促進につながる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・積極的に学会発表する者と、そうでない者とが2極化する傾向が見られた。
	【課題】 ・研究データを取りまとめ、全ての院生次年度の学術発表への参加、エントリーを促す。全国規模の大会だけでなく、参加へのハードルが低い小規模な集会などへの参加を促す。
根拠資料名	アンケート集計結果、指導教員からのヒアリング結果資料

3. その他に関する総合的事項

①	
目 標	専攻および各研究分野における学術交流、地域交流の活性化を促す。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和7年）
実施 スケジュール	学術活動やシンポジウム、ワークショップ等のイベントについて、夏季休暇等、長期休暇期間も利用しての参加を推進する。
目標達成を測 定する指標	参加者を対象としたヒアリングやアンケート等
自己評価 (☑を記入)	<input type="checkbox"/> 達成した <input checked="" type="checkbox"/> 一部達成した <input type="checkbox"/> 達成できず要継続 <input type="checkbox"/> 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	博士前期課程学生は、長期休暇を利用するなどして、活発に学会発表を行った。また、大学院の講義科目（地域経営政策論、環境教育法、フィールド調査法）などの一環として、地域でのシンポジウムや地域交流活動に参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・夏季（8月、9月）、春季（2月、3月）に研究に関わるイベントの開催頻度に関係するが、授業がなく時間が取りやすい時期であれば参加が容易である。 【特色】 ・学会や研究会のイベントに加え、業界や企業体が主催するイベント等を紹介できれば、将来のキャリアを検討するための有効な情報になる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・学生自身が各イベントにどの程度参加したか十分に把握ができていなかった。 【課題】 ・教員、院生間でイベントに関する情報交換を積極的に行うこと、そして教員と学生との十分なコミュニケーションにより、参加したイベントについて把握に努めたい。
根拠資料名	アンケート結果資料